

注解『七十一番職人歌合』稿(二十)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第四十三番および第四十四番の注解を収めた。

四十三番 枕売 畳刺

【職人尽】

〔鶴岡放生会職人歌合〕七番左 畳差

いつくにか月の光のさゝさらん波をたゞみの浦のみちしほ

恋すれはこゝろたかくそなりにけるへりもおかすやいひきかせまし

判云、月は、左の光くもりなく、あさやかに侍へし。……持と申侍ぬる。よのつねの判者はあさけり侍らんかし。

恋は、左の畳しきしのふさまはみゆれと、さしも侍らす。右……為勝。

〔吾吟我集〕職人 あつらへの数を畳のことはにさすが上手はいとまなげなり 〔古今夷曲集〕畳師の後世いかに

してか助かり侍るべきと問ひける返事に 念仏をさしては申しをかずとも功たたみなば西へ行くべき八権大僧都光宥

注解『七十一番職人歌合』稿(二十)

〔長崎一見 職人一首〕七番右 昼屋 花の浪たたみや寄する河ばたに歌のむしろを敷嶋のかけ …… 昼のとう正敷
 き作意にこそ、花いいをほせて藁入れがたし。右の可為勝。 〔後撰夷曲集〕寄枕恋 夢になりとあはせてたべと君
 がぬる枕神にや祈誓かけまし 〔みつなか〕 〔銀葉夷歌集〕寄枕恋 あす逢はういや逢はじとの木枕よぬつたりはげ
 たり言ふが物うき 〔伯水〕 〔人倫訓蒙図彙〕昼師 昼といふは今の薄縁といふもの也。 昼み置きて是を敷くゆへ也。
 今時禁裏御昼屋、烏丸通八幡町の下大針加賀、同通四条上ル丁伊阿弥筑後、油小路六角下ル丁同長門、大坂道修町、道頓
 堀、京堀川中立売の下、其の外所々にあり。 〔狂歌ますかがみ〕寄薄縁恋 忘らるる身をうすべりのいひも出てし
 くしくとただなくばかりなり 翁評云、泣くばかりなると被成まじきや。なるにては大様に聞こゆなり。てはかくつく歎。
 身をうすべりとは、身を卯の花、身を浮雲とよめる風情を離れず。艶に聞こゆ。 〔狂歌活玉集〕昼屋何がしの病見廻
 にまかりて 床につく重き病の昼屋はいとしやこんのへりとこそ聞け 〔誹諧職人尽〕枕売 昼さし 鷹がねを頃と
 や思ふまくらうり 〔欣穿〕 誰蚊家に売人ふたりが枕かな 〔五丈〕 若草や寝よげに見ゆる枕うり 〔里牛〕 昼寝よの鐘
 も日長し枕売 〔寥和〕 今日よりも真菰に恥ぢよ 昼さし 〔沾徳〕 引く糸に蛙なくなりたたみさし 〔尺子〕 青みたつ備
 後表も霞みけり 〔黄英〕 糸遊の手から漏るるやたたみさし 〔芳尺〕 青柳や糸繰り返すたたみさし 〔里牛〕 春の日も
 打ち歌ふ日やたたみさし 〔雁洲〕 年浪の青海原や表替 〔寥和〕 〔今様職人尽百人一首〕 たゝみ屋 まはりばま
 だ床ながら踏みぬるを菰のいづこにへりつくるらん 「そがの畳をへりといふ半太夫節があるな。ごん八、聞いたか」「そ
 れは、おやの畳だ」「締め糸が足りぬは」 〔彩画職人部類〕 畳 本朝式云、掃部、寮長畳短畳トテ、禁裡、御畳ハ、長
 七尺、厚二寸二分。三公及門跡ハ、長六尺六寸、厚一寸八分。吉野高野両山亦用之。故ニ呼テ曰ニ高野間ト。畿内、民家ハ、
 長六尺三寸、厚一寸七分。謂フ之ヲ京間ト。関東、民家ハ、長五尺八寸、厚一寸六分。謂フ之ヲ田舎間ト。 〔職人尽発句合〕
 二十八番右 昼さし 昼さしししもせはしき師走哉 さしもせはしき師走のさまは、昼さしが身ひとつにもよらず。梅も
 柳も同じければ、壁ぬりに墨引くべし。 「さしもしらじなは、わが畳屋の新弟子也」 〔職人尽狂歌合〕 右 昼師
 昼さす業の外にも降り積もる雪に滑りてついた片脰 …… 右、たたみさしの脰餅、狂じたるさま、大方ならず。いたき
 作者と知らる。此の番ひ、よき持とぞ申すべき。 右 昼さし 積む雪の尺はとるとも昼さしここの通りは踏までな

がめん ……右、雪を愛づる心深くて、尺はとれども踏みもつけぬさま、執心深くや。左、劣れる哥ならねど、……右を勝と定めて侍り。 / 左 畳さし 畳さし近江表を踏み見ればひらひらと降る夕暮の雪 左、近江なる比良の山 よろしく続けられて侍り。……左勝にや。 / 右 畳さし 初雪を人にはいかで踏ませじと庭の切戸もさせる畳屋 ……右、踏ませじの詞、さすといふ、ともにいろふしなるべし。勝と申すべからん。 / 右 畳さし さしはへて見やれば雪の古畳庭さへいつかおもてがへしつ ……右、庭の面の俄に白けたる、よろし。左右、あまりの相違も侍らねば、持と定めつ。 / 右 畳さし 畳屋は仕事しまへど裏表かへさじと降る門の大雪 ……右、裏表、かへさじなど申されし、一きはおかしければ、聊まさるべくや。 / 〔江戸職人歌合〕二十一番左 畳刺 円居には畳薄縁数はあれど今宵の月にく物ぞなき 左右共申旨なし。判云、今宵の月にしく物ぞなき、をかしよう侍り。可勝也。 さしはへて来ぬ夜あまたをふる畳むなしき床に我が独り寝る 左右共又無申旨。判云、むなしき床に我が独り寝る、いとよろしくも侍るかな。……左為勝。 / 〔近世職人尽絵詞〕畳刺 畳は備後表をよしとす。備後国松浦草深浦より、備中国笠岡村浜まで、備中国笠岡浜より大坂まで、大坂より江戸三またまでの運賃、宝永の比にくらぶれば、享保の比にいたりて、一倍にいたれりといふ。 「床はこのやうに固きぞよき」 「年の暮れにはいつもせはしきぞ」 / 〔略画職人尽〕前髪のとさへ青く刺して居る野郎畳も似合はしき弟子 / 〔宝船桂帆柱〕畳師 栄えゆく家繁昌や一畳の畳み重ねる小判山ほど 「十五とふりとは格別上物だ」 / 畳表屋 商ひも広島備後備中や琉球までも響く繁昌

【本文】

四十三番

秋さむきね屋の戸くちの杉まくら
さしいるからに月そ身にしむ
山の端にいさよふ雲のをしくゝみ
月にへりあるあきのゆふくれ

さむき―〔類〕寒き ね屋―〔忠〕〔明〕ねや〔類〕闇 戸くち―〔類〕戸口
山の端―〔類〕山端
あきのゆふくれ―〔類〕秋の夕暮

左哥、さるへかしうきこゆ。右は、雲のには
ひて、月にへりのあるやうに見ゆる事、さ
もとおほえたれと、いさゝかをしつげたる
詞、わたくしいゝたり。左勝へくや。

むろいたしまたひもやらぬにまくら
かふれかゝりてそひもはてはや

ひとりふすたゝみのうらのかくしはり
人にしられぬこひもするかな

左、うるしにかふれかゝる、たくみなれ

とも、右、かくしはり人にしられぬ、当道

の秘事とかや。忍恋のさしつゝきよ
きこゆ。右可勝。



枕うり

今一のかたも

持て候。ひそかに

めし候へ。

たゝみさし

九條殿に何事の御座

あるやらむ。帖をおほく



左哥—〔類〕左歌 きこゆ—〔類〕聞ゆ にほひて—〔類〕匂ひて
あるやうに見ゆる事—〔類〕有様にみゆること

いさゝか—〔明〕いささか

わたくしいゝたり—〔尊〕白〔忠〕明〔明〕わたくしにゝたり〔類〕わたくしににたり

むろいたし—〔類〕むろ出し にまくら—〔類〕新枕

ひとり—〔類〕独 かくしはり—〔類〕かくし針

こひ—〔類〕恋

うるし—〔類〕漆 たくみ—〔類〕巧

かくしはり—〔類〕隠し針

忍恋のさしつゝきよきこゆ—〔類〕恋のさし続き能聞ゆ

枕うり—〔白〕〔類〕枕売〔忠〕四十三番枕売

今一〔白〕〔忠〕いま

持て—〔白〕〔忠〕もちて

たゝみさし—〔白〕〔類〕畳刺〔忠〕畳刺たゝみさし

あるやらむ—〔白〕〔忠〕あるやらん おほく—〔白〕〔忠〕多く

【語注】

◎枕には、木枕・籐枕・菰枕などの種類があるが、本職人歌合では、月の歌は木枕の一種の杉枕を詠み、恋の歌は籐枕などを念頭におくと思われ、絵も籐枕を描く。恋の歌は枕の製造を詠んでいるが、枕の製造と販売とは未分化であったのであろう。

畳は、古くは、今いうところの薄縁うすべりで、座ったり横臥したりするところだけに敷いたが、鎌倉中期ころには床のついた畳が現れ、室町時代になると部屋に敷きつめることが多くなった（『国史大辞典』「畳」の項）。

枕と畳とは、ともに坐臥具。

◎戸くちの杉まくら 「杉戸」からの連想で、「戸口の杉」と続くか。また、「戸口の隙間」から「杉枕」と続くか。「杉枕」は杉で作った木枕。

◎さしいるからに月そ身にしむ 「杉枕」を「指す」（板を組み合わせて作る）の「指し」から「射し入る」と続けるか。（戸の隙間から）射し入るにつけても、月の光が身にしみて感じられる。月が身にしむ、という表現は、「秋風の関すさまじく吹くなべに更けて身にしむ床の月影入伏見院」（新拾遺集五、秋歌下）、「冬の夜はながむる月の身にしみてさごころも寒くなりまさるなり」（伊勢大輔集）などの例がある。

◎をしくゝみ 「押しくくむ」は、物を押しくるむこと。畳に縁をつけることをも、こう言ったか。ここは、雲が月を覆うことを、戯れて言う。勿論、雅語ではない。

◎月にへりある 「へり」は縁。月が薄雲に覆われて、かえって輪郭がはっきり見える状態を言うか。畳の「縁」に掛ける。

◎さるへかしうきこゆ （いい意味で）もつともらしく聞こえる、というのであるが、「さるべかし」という言葉は、歌合判詞では管見に入らない。

- ◎雲のほひて 「匂ふ」は、ほの明るく光ること。ここでは、雲が月の光を微かに透すことをいう。
- ◎をしつけたる詞 強引な表現の意であろうが、判詞に用いる言葉ではない。ここは、「押しつくみ」、「月に縁ある」などの歌の言葉に合わせて、「押しつきたる」と戯れたか。
- ◎わたくしいゝたり 誤写であろう。他の諸本はすべて、「わたくしにゝたり（にたり）」。「私に似たり」は、ひとりよがりな表現のようだ、の意であろう。ただし、歌合判詞には例を見ない。
- ◎むろいたし 「室出だし」という語は管見に入らないが、漆室から出したばかりの物をいうのであろう。ここは、絵にあるような籐枕（中央の籐の部分に赤漆、側板に黒漆を塗る）などを念頭に置くのであろう。
- ◎またひもやらぬ 漆が、まだ乾ききらないのである。
- ◎にるまくら 「新枕」は、言うまでもなく、男女が始めて共寝することをいう雅語であるが、ここは、出来上がったばかりの枕という意味を掛けている。雅語をこのように、即物的な意味で用いた点が面白い。上句全体で、序詞的に下句の「かぶれかゝりて」に続く。
- ◎かぶれかゝりて 漆にかぶれるように、相手に傾倒する、の意か。ただし、この意味での「かぶる」は、近世後期以降の例しか管見に入らない。
- ◎かくしはり 隠し針。縫い目が表から見えないようにする縫い方。『ヴィジュアル史料 日本職人史（I）』に、「畳床に畳表を縫いつける時、表の面に縫目の見えないようにすることで、現在でも茶室などの畳を刺す時に行うという」（「畳刺（二）」の項）とある。序詞的に、下句の「人に知られぬ」に続く。
- ◎人にしられぬこひ 相手に知られない恋。「河の瀬になびく玉藻のみがくれて人に知られぬ恋もするかな（友則）」（古今、十二、恋歌二）などの例がある。
- ◎当道 その道、すなわち、ここは、畳刺の世界。
- ◎忍恋のさしつゝきよきこゆ 類従本は「忍」を落とす。忍ぶ恋を詠むのにぴったりという言葉続きたというのであるが、「さし続き」という言葉は、歌合判詞で用いないばかりでなく、一般にもあまり用いない言葉であつたらしい。

(同様の意味で、歌合判詞では、「文字続き」、「詞続き」という語がしばしば用いられる。)ここは、畳刺だけあって、さすがにさしつづきがよい、と戯れたのである。

◎今一のかたも持て候。ひそかにめし候へ。「今一つの方」は淫具を指すか。未考。こつそりお買いなさい、というのである。

◎九條殿に何事の御座あるやらむ。帖をおほくさ、せらるゝ。「九條殿」は、九條家、ないしその邸宅。「帖」は畳を数えるのに用いる言葉。「畳」に同じ。本職人歌合の成立したと思われるころ明応九年前後の九條家では、文明十四年、元関白氏長者政基が家督を息尚経に譲っていたが、政基の従兄弟で執事であった唐橋在数との対立から、明応五年、政基・尚経父子が自邸において在数を殺害、父子は勅勘処分を受け、出仕を停められた。同七年十二月、勅勘が解かれ、政基は薙髪。その後、政基は、文龜元年三月、家領和泉国日根野莊に下つて、永正元年十二月まで、莊園支配にあつた(『国史大辞典』「九条政基」の項)。この間、文龜元年六月、尚経は関白氏長者に任じている。畳刺の言葉は、これらのできごとのいづれかを示唆するか。

【絵】

枕壳は、剃髪した頭に塗り笠を被り柿色の僧衣を着る。左手で前に置いた袋の口を持ち、右手に籐枕を持つ。籐枕は頭を置く部分が赤漆、側面が黒漆塗り。白石本、忠寄本は、籐枕の形をやや異にする。明暦板本は、畳刺の絵と重なつて、絵の一部が隠れる。

畳刺は、烏帽子、直垂、袴姿で、片肌を脱いで、台の上に置いた畳に縁を付けているところ。縁は高麗縁か。そうだとすれば、『海人藻芥』に、「畳之事、……大紋高麗ヲバ親王大臣用」之。以下更不可用。大臣以下公卿、小紋ノ高麗端也」とあり、絵の中の、「九條殿」云々の言葉と符合する。ただし、縁の紋様などは諸本に差がある。明暦板本は、右手に持つ針を描く。

【参考】

○ 針手向けよと夢に見えけり

畳さし道具待つ間に頓死して

(犬つくば集)

○われらの(家の部屋)は、絨緞や敷物で飾られる。彼らのは、藁のマットで飾られる。

(日本覚書、十一)

○ヨーロッパの人びとは、寝台または折りたたみ寝台で高いところに寝る。日本の人びとは、部屋カイザに敷かれた畳タタミの上で低いところに寝る。

(同)

○われらの枕は、羽毛や麻(?) または木綿で作られ、柔かく細長い。日本のは木製で、一種しかなく、一パルモほどの長さである。

(同)

○第五は、一般に家屋全体についても、また座敷ザイクラや各部屋についても、あらゆる種類の家屋住居の建物は、縦横の長さも壁の高さも、一定の寸法できわめてすぐれた調和を保って造られることである。それはすべての部屋を一種の敷物で敷きつめるからであつて、その敷物は厚い真座マクラのようなもの(畳)であつて、縦と横の長さも一定の限定された大きさで、横は縦の半分であり、たがいの間にすきまのできないように、すべての真座をたがいに合わせていくと、真座で敷きつめられたたいへん大きな座敷ザイクラとなる。それらの真座はその周辺が彩色した布か絹かで一種の縁飾りがしてあつて、甚だ優雅な趣を添えており、座敷はそのために四角のものを敷いたように見える。

(日本教会史、一巻、十二章)

○このようにして、おもに天下Tença(Tença)殿の御殿には、ただ一つの屋根の下で、この様式に従つていろいろな座敷に区分された壮大で主要な座敷がある。それは千の真座(畳)が敷かれていて、床の面積は各辺幾何学的六ペー半の正方形(一坪)が五百ある。真座は縦が六ペー半、横が三ペーあまりであつて、それがわかつている者には、非常によく調和のとれた形であることが判断できる。この座敷はときどき、ただ一つの座敷となり、そこで天下Tença(Tença)殿が王国の諸領主と公の儀式を行なう。それをわれわれは、太閤Taycoの大坂Vasacaの御殿と、江戸Yedoの將軍Xōgunの御殿とで時折見た。その本来の名称は千畳敷Xengogiqny(Xengejiquy)といひ、千の真座すなわち

高座エストラド（厚畳）を意味する。

（同）

○第三のこととして、部屋について彼らが大いに熱意を傾けるのは、この高座エストラドすなわち真座（畳）をきれいに敷きつめるということである。その真座はたいへん美しくて、この目的のために播種し育成した藪で上品に織つてあり、その真座の周縁には、前述したように、それを専門に生活しているすぐれた職人の作つた縁飾りがついている。真座のいろいろな敷き方で、全体がただ一つのもののようにたがいにぴったり合つて密着しているの、見た目にも一種優美な調和をかもし出している。三デードの厚さを持つたこれらの真座すなわち高座を敷くために、部屋はすべてその寸法に合わせて建てられるのであつて、実際にこれらを敷いた一つの座敷とその清潔さを見ると楽しいものである。

（同）

○彼らの作つた家はすべて正確な寸法によつてゐる。それはそこに敷かれる真座エステイラすなわち畳（tatans）のためであつて、それが一定の寸法と大きさからできているからである。すなわち、それぞれの畳は縦が八パルモ（六尺五寸）、幅が四パルモ（三尺二寸あまり）あり、広間カイマラや部屋には現在では常にこれが使われている。ここでは詰め物をした厚さ三デードの畳が相互にぴったりと合わして敷かれているので、まるで板のようであつてわずかの隙間も残さない。

（同、二巻、三章）

四十四番 瓦焼 笠縫

【職人尽】

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 笠屋 久方の月の笠をばをのれしも桂男の空に晴らん 〔吾吟我集〕 寄蓑笠恋 忍び

あまる涙の雨に隠れ蓑隠れ笠こそ着まくほしけれ 〔後撰夷曲集〕 寄笠恋 来もせいで君はすげなや菅笠の紐も結ば

ぬ縁ぞものうき△知秋▽／〔大団〕寄笠恋 はらはらと涙の雨の降るからに目より上なる笠もものうき／〔狂詠
 大百人一首〕法性寺笠売時宜輕薄大氣大吉 京の町つい出てみればけさ笠の曇りに向かうれも人なみ／〔用明天王
 職人鑑 職人尽〕ふたりの恋路一对の錫屋瓦屋かはるなど…／〔繪本御伽品鏡〕瓦屋 梯の子に上りてみれば煙た
 つ瓦焚くので氣遣もなし／〔狂歌乗合船〕寄笠恋 見ぬふりをすんと菅笠めせき笠隠れ笠こそ恋のひぢ笠△野蓼▽
 ／〔狂歌活玉集〕寄編笠恋 出口から駕籠はおろせが首尾をしてひとめせき笠深き心は△之信▽／〔誹諧職人尽〕
 瓦焼 笠縫 梅の咲く脇にすずし瓦焼△一步庵 千里▽ 花鳥や縫ふてふ笠の入り仕事△茂井改 桃蹊▽ 笠ぬいの里
 や手づから田植うた△鳥羽 塩塵▽ 瓦焼煙は低し天の川△蟠桃▽ あつらへのおめこも近し瓦ふき△寥和▽ 蓮の華や
 聖靈達の隠れ笠△貞徳▽ 市人にてこれ売らん雪の笠△はせを▽ 笠縫も昼から休め花の雪△癡狄▽ 日まはりの花の
 笠縫ふ麗かな△和晋斎 百二▽ 出来揃ふ麦に並ぶや笠の秋△寥花▽ 御地藏へ笠參らせん六つの花△寥和▽ 〔今
 様職人尽百人一首〕かわら師 ひかきむる瓦焼く火のよるは消へて昼は燃へつつまますと思へば 「ちと土があまい」
 ／〔職人尽発句合〕二十六番左 瓦大工 瓦焼く煙の末や白雨雲 左、させるたくみもあらざれど、風情うつりて聞こ
 ゆ。以可為勝。 「此鬼板は人も褒むべし」 五十七番右 笠ぬひ 蝶々や縫ふてふ笠の軒のつま 笠ぬひが句の事
 からも、なを骨なき心地すれども、少しはまさるべきか。 〔職人尽狂歌合〕右 笠ぬひ 笠縫の蜘蛛手に道は作れど
 もすげなく人の訪はぬ雪の日 ……右、これも四の句の秀句面白くは侍れど、跡をだにつけぬを雪にはほいとすめるを、
 道作るといへる、いささかこちなきやうに侍れば、左を勝と定めて侍り。 右 笠縫 いとなみの世を鶯に引きかへ
 て雪に縫ふてふ六つの花笠 ……右、古今集なる、青柳をかたいとによりてといふ哥をふくめて、世を鶯など続けられし、
 哥詠む人の口つきとは知らる。六つの花笠、はえありて聞こゆ。左の塩焼のしたり顔なるも、立ち並びては出で消えしつ
 べくや。 〔今様職人尽歌合〕かきぬひ 人目せき縫ふ菅笠のうらとひて引き出してみんな恋の糸口 左、人目のひま
 をうかがひ縫ふ菅笠のうら問ひて、裏の方へ糸口を引き出すなど、こまやかに綾どりたる針先、功者のわざとみゆ。惜し
 むらくは、三四の句に、て文字重疊して、笠紐の耳にさはり侍り。 …… 「今様は、年々に笠のはの深くなりて、縫ひに
 くく、はかゆかずや」 いとせめて笠縫ふ針の先ほども思はぬ人のすげなきぞうき 左の哥、糸針など取り合はせて、

応永哥合のつぼね笠をおつ被せたる、浅々として、心深江の細工ともみえず。難波菅笠、置き古してみゆ。……左右、同じほどの事なるべし。／雪とみし花の加賀笠あさもよし絹糸縫ひの菅のま白さ／笠を縫ふ業ありながら逢はぬ夜の涙の雨はふせぎかねつつ／雨もよひ空をうち見て笠縫へど月に召せとは思はぬものを／鶯に笠を縫はせて今日もまた谷渡りして月を見る哉／山風がもて来て花を被せけり笠さしおきて縫ひもとめてき／縫ふまにをりをり袖の雲隠れ月にひとしとみしま菅笠／売り物に笠縫ひながら今宵照る月に召せとは願はざりけり／身の皮を脱ぐがつらさに油断なく竹の子笠を縫ひにけるかな／難波笠短き葦のふしの間も縫ひてこのよを過ごされぬ身は／いとなみに縫ふとも月の桂男の顔見る夜半は笠な被せせ／思ひきや雨を凌げる笠縫ひて恋の涙にぬらすべしとは／いかにせん笠は縫へども憂き恋の涙の雨は凌ぎかねけり／針めどもさやかなりとて夜仕事に通しては見る月の笠縫／たが事を聞きても樂はなかりけり上見ぬために笠縫の業／えもいはで包む小笠や菅の根の長々しかる恋もする哉／いとまなみ夜に縫ふ笠の月影を並ぶ畳の田毎にぞ見る／縫ひかけし我が笠よりもまだ出来ぬ妹はかぶりをふるがつれなさ／このごろは笠をも縫はであだ人をすげなしとのみ恨むなりけり／〔略画職人尽〕角文字の今戸あたるの宿見れば瓦の鬼のすだく也けり／針あとの星を見てさへあすもまた日和と心急ける笠売／〔宝船桂帆柱〕華瓦 鬼瓦 平瓦 䟽瓦 丸瓦 䟽瓦は巴瓦をいふ。花瓦とは唐草のこと也。鴉尾は鳥衾瓦 虫吻とは鱗瓦のことなり。平瓦、丸瓦あり。巴瓦は丸瓦の端に底あり。巴の紋ある故に名づく。唐草瓦は平瓦の端、水草の文をつくる。ちと鐙の形なる故に名づく。鬼瓦は方形にして、裾の両端巻きて、厥手の如く、鬼の面をつくる。または、木板にても作る故、鬼板ともいふ。獅子口は三の鳥衾をいただき、表に波の文をつくる。棟の端におきて、鬼瓦に代ふる也。菊丸は巴より小さく、菊の文をなして、棟の上に並べ重ねおくものなり。輪違は形爪甲に似たり。故に、爪瓦といふ。則ち、菊瓦の上に並べ、輪違の文の如くなす。薨の飾りとするもの也。女牟度瓦は、丸瓦の半分なるもの、屋根の丸瓦の交に用ひて隙間をふさぐ。堅瓦は、壁のこし塀に用ゆ。敷瓦は、石畳となすもの。土寶瓦は、その形筒のごとく、地中に埋めて水道とす。井戸瓦は石垣の代はりとなすもの也。凡そ、瓦数品ありて枚挙せず。呂氏が曰、陶者の瓦をつくる、必ず円くして、割り分かつときは瓦なり。また合はず時は、円にしてその瓦の質を失はずといへり。／瓦師 高き屋に登りて見れば煙立つ竈にぎ

【本文】

四十四番

しはしたゝうつふせふせしめかはらの
あふけはこそは月もみえけれ

名にしほはゝわれこそはみめかさぬひの
うらさひしかる秋の夜のつき

左、瓦ふきの才学、猶入たゝぬ月也。右、
まことに作者の名にほふ浦の月、より所

ある歎。右可勝。

いつまでをかきりならましかはら屋の
したやくむねをしる人はなし

見えしとやうちかたふくるつほねかさ
すけな気なるはうらめしきかな

左右おなしほとなれとも、右は、すこしふる
まへるさま、ゝさるへくや。



瓦やき

南禅寺

より、

たゝうつふせふせしめかはら―〔類〕只うつふせくしめ瓦

名にしほはゝ―〔忠〕〔明〕〔類〕名にしおはゝ、われ―〔類〕我
かさぬひ―〔類〕笠縫

うらさひしかる秋の夜のつき―〔類〕うら淋しかる秋夜の月
瓦ふき―〔類〕かはら葺

名にほふ―〔忠〕〔明〕〔類〕名におふ
ある歎―〔類〕あるか

かきり―〔類〕限 かはら屋―〔類〕瓦屋
したやく―〔類〕下焼

つほねかさ―〔類〕つほね笠
気―〔明〕げ〔類〕け かな―〔類〕哉

瓦やき―〔白〕〔類〕瓦焼〔忠〕
四十四番 瓦焼 かはらやき

いそかれ
申候。

笠ぬひ

世にかくれ

なき

かさぬひ

よ。



笠ぬひー〔白〕〔類〕笠縫〔忠〕

世にー〔白〕あめか下に〔忠〕あめか下に

世に かさぬひ
笠縫

かさぬひー〔白〕〔忠〕笠ぬひ

【語注】

◎瓦焼の恋の歌と絵およびその中の言葉は、瓦を焼くことを扱っているが、月の歌は、判詞にも「瓦葺」というとおり、瓦を葺く作業を詠んでいるように思われ、本職人歌合では、瓦焼と瓦葺とは同一視されていたようである。しかし、鎌倉時代に興福寺に瓦葺座があった（『新大系』付録）ように、それぞれの職能の特殊性からみても、両者は古くから分化が進んでいたのではないかと思われる。

瓦と笠とはともに雨や日差しを防ぐことから、番われたか。

◎しはしたうつふせふせしめかはらの「女瓦」は凹面を上にして葺く瓦。凸面を上にする男瓦と食い違いに葺く。しばらく飯にうつ伏せに伏せておいた女瓦の。序詞的に、下句の「仰げばこそは」に続く。

◎あふけはこそは月もみえけれ「思ふことをなど問ふ人のなかるらむあふげば空に月ぞさやけき入慈円」（新古今

集十八、雜歌下)を意識した表現か。自ら仰いでこそ美しい月も見えるものだった。

◎名にしほは、 「ほは、」は、忠寄本、明暦板本、類従本に「おは、」とあるのが正しい。「名にしほはば」は、しかじかの名を負うているのならば、の意で、和歌の初句にしばしば用いられる表現。ここは、「笠縫の浦」についていう。

◎かさぬひのうら 「笠縫」は、万葉集に、「しはつ山うち越え見れば笠縫の嶋漕ぎ隠る棚なし小舟へ黒人▽(三、雜歌)と「笠縫の島」が見えるが、所在不明。難波、三河、近江などにあてる説がある。「笠縫の浦」という例は管見に入らないが、「笠縫の入江」(草根集)の例もあり、特に不自然な表現ではなからう。「笠縫の浦」から「うら淋しかる」と続ける。

◎瓦ふき 本職人歌合では、瓦焼と同一視されているようである。

◎才学 「才覚」とも書く。両者は本来別語であるが、中世以降混同して用いられ、発音は「さいかく」が普通となった(角川『古語大辞典』「才覚」および「才学」の項)。才知・才能の意であるが、「わがわざさいかくありてよめりと見る歌は、わざとわるきなり」(拾玉集)のように、特に、歌を詠む上での機知・工夫についていうことがある。ただし、歌合判詞で用いた例は管見に入らない。四番語注「我道のさいかく、まことにきこえたり」の項参照。

◎猶入たぬ月也 「入り立つ」は、物事に精通すること。ここは、まだ十分に精通していない月の詠みようだ、というのである。加えて、歌に「仰げばこそは月も見えけれ」と、中天の月を詠んでいるから、「入り立つ」に、月が山の端に入る意を掛けて、なるほどまだ当分沈まない月だ、と茶化したか。

◎作者の名にほふ 忠寄本、明暦板本、類従本に「名におふ」とあるのが正しい。

◎より所ある歟 三十番語注「より所ある歟」の項参照。

◎いつまでをかきりならまし いつまでを限りとするのであろう。

◎かはら屋のしたやくむね 「瓦屋」は瓦を焼く窯。「瓦屋の」は、「忘れずよまた忘れずよ瓦屋の下たくけぶり下むせびつつへ実方▽」(後拾遺集十一、恋二)、「瓦屋の下にこがるる夕煙たえぬ思ひのありとだに見よへ師継▽」(続後

撰集十二、恋歌二)などのように、恋の歌で、「下たく」、「下にこがる」などの言葉を引き出すために、よく用いられる。これも序詞的に、人知れず胸を焦がす意の「下やく」に続く。「胸」に、「瓦」の縁語「棟」を掛ける。

◎見えしとや 私に顔を見られまいと思つてか。

◎つばねかさ つばね笠。女の被る、中央が高く窄まった笠。

◎すけな氣 そつけない様子。ただし、通常、和歌に用いる言葉ではない。「すげ」に笠の縁語「菅」を掛ける。

◎ふるまへるさま 「ふるまふ」、あるいはその名詞形「ふるまひ」は、「左歌、姿ふるまひいとど宜しくみゆ。不破の関といへるや殊に寄れる事ならん」(建春門院北面歌合、関路落葉九番判詞)、「右、色には秋をなどいへるおもむき、とかうふるまひては侍るめれど」(六百番歌合、夏上五番判詞)、「左歌、つねに聞きなれたるさまにや。月よさしなどいひて、ふるまへるさまにや」(千五百番歌合、九百四十五番判詞)のように、歌合判詞にまま用いられる。正確な意味はとらえがたいが、ある種の趣向を凝らした表現について言うようである。(なお、『愚秘抄』鶴本に、「初五文字にて切る歌は、ふるまひ歌に多分侍るから」云々とある。)ここで、具体的にどの点に関して言うのか明らかではないが、『新大系』の、「つばね笠を傾ぶけている様子をいう」は納得しがたい。

◎南禅寺より、いそかれ申候 「南禅寺」は、現京都市左京区南禅寺福地町にある臨済宗南禅寺派の本山。応仁元年の兵火で焼け衰微した。本格的な復興に向かうのは桃山時代で、この「急がれ申し候」が、具体的にどのような事実と対応しているのかは未考。

◎世にかくれなきかさぬひよ 「世」は、白石本は「あめか下に」、忠寄本は「あめか下に」の右に「世」と校合。いずれにしても、笠縫の自慢の言葉。あるいは、被ると姿が見えなくなるという隠れ笠からの連想で、逆に「隠れなき」と戯れたか。

【絵】

瓦焼は、直垂袴姿で腰刀を差す。窯の前に跪き、両手に男瓦を一枚ずつ持って、焼き具合を改めている様子。横に、

女瓦数枚と鬼瓦一つ。白石本、忠寄本は、鬼瓦を描かず、窯の描き方を異にする。明曆板本は、左手に男瓦、右手に棒状の物を持つ。この棒状の物は未考。また、女瓦、鬼瓦、窯の描き方を異にする。類従本は、女瓦、窯の描き方を異にする。

笠縫は、諸肌脱ぎで袴を履き、市女笠を編んでいるところ。前に小刀。横に、菅の葉らしきもの数葉と骨組みだけの市女笠。白石本、忠寄本は、骨組みだけの笠を笠縫の前、明曆板本は、小刀を横に描く。

【参考】

○ 分け入りてきるや舟木の山ならん

嵐にたのむ笠縫の里

(名所千句、七)

○ 花にはとあら山おろし聞き侘びて

うちかたぶくる笠縫の道

(同、十)

○ れいの声こそ高くきこゆれ

谷越しに笠召せやつと呼ばはりて

(誹諧連歌抄)

○ 笠を召せ、笠も笠、浜田の宿にはやる、菅の白ひ尖り笠を召せなう、召さねば、お色の黒げに

(閑吟集)

○ 柳の下の御児様、朝日に向かふて御色が黒い、御色が黒くは笠を召せ、笠も笠も、いつきよ尖り笠をそり笠、序に嘘く笛の麗に聞こゆ、あふそれも推した、忍び来いとこの笛の音、裏道来いとこの笛の音 (保教本狂言小舞「柳の下」)